

野呂邦暢



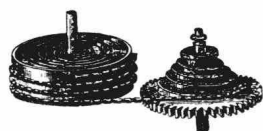
往復書簡集

長谷川修

陸封魚の会
Group Landlocked Fish
— 編

● 葦書房

野呂邦暢



往復書簡集

長谷川修

陸封魚の会——編
Group Landlocked Fish

●葦書房

陸封魚の会 Group Landlocked Fish

〒812 福岡市博多区博多駅前3-9-5-807システムクリエート内

TEL (092) 411-7821 FAX (092) 411-1030

MEMBERS

秋丸 修一	田代俊一郎
柴田 勝則	中野 章子
田島 安江	長谷川郁美

野呂邦暢・長谷川修往復書簡集

平成二年五月八日初版印刷
平成二年五月十三日初版発行

編者 陸封魚の会

発行人 久本三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号

電話 福岡〇九二(七六一)二八九五

振替 福岡 一一三九四三〇

印刷・製本 凸版印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

編集協力 システムクリエート

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0095-9017-0135

装幀
毛利
一枝



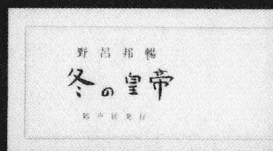
此為浅草 電氣 映画 野呂暢暢 氏 昭和51年3月、38歳のころの野呂邦暢 早市仲沖町の自宅書斎にて。



自宅書斎。愛用の机の上には幼時期の写真が飾ってある



諫早市仲沖町の自宅。『諫早菖蒲日記』の主人公の先祖が住んでいた



『冬の皇帝』豪華本直筆 昭和51年 鶴声舎刊



諫早市上山公園内にある野呂邦暢文学碑。昭和61年建立

野呂邦暢（のろくにのぶ） 年譜

一九三七年（昭二二）

九月二十日、父政児・母アキノの次男として、長崎市岩川町に生まれる。長男に祥明、弟に弘道、長雄、妹にたみ、ぬいがある。本名は納所邦暢。幼少の頃から本と絵が好きで、紙とエンピツさえ与えれば、一日静かにしている子供であった。

一九四四年（昭一九）七歳

長崎市立銭座小学校へ入学。祖父、死去。

一九四五年（昭二〇）八歳

春、父召集のため、当時母方の祖母リヲと叔父（母の弟・山口善三）の住む、諫早市城見町三十二番地へ移転。諫早市立北諫早小学校へ転入学する。八月九日、諫早から爆心地長崎の空を遠望する。（生誕地である長崎市岩川町は爆心地より八百メートルほどの至近距離に位置し、銭座小学校での同級生はほとんどが被爆して死亡）

一九五〇年（昭二五）十三歳

四月、諫早市立北諫早中学校に入学。絵を描くことと、読書の毎日。

一九五三年（昭二八）十六歳

四月、長崎県立諫早高等学校に入学。一年の秋、美術部に入部。當時三年生で部長をしていた山口威一郎と出会い、文学をはじめ、芸術一般について刺激を受ける。

一九五六年（昭三一）十九歳

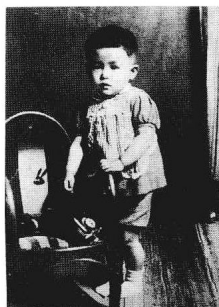
県立諫早高等学校卒業。京都大学文学部受験に失敗。そのまま三ヶ月余、京都堀川の下宿屋で生活する。映画をひんばんに見、名曲喫茶で終日、本を読む。この頃、郷里で父が仕事に失敗し、体調を悪くして入院したため、浪人生活を切上げ、帰郷。職安へ通う日々が続く。秋上京。大森の友人宅へ寄宿し、ガソリンスタンドの店員となる。その後、喫茶店のボーイ、ラーメン屋の出前持ち、世界画報のセールスマンなど、いくつかの職業を転々とする。

一九五七年（昭三二）二十歳

春、帰郷。六月、佐世保陸上自衛隊相浦第八教育隊入隊。七月二十



諫早高校時代の野呂。



長崎市岩川町の生家にて。
2歳ごろの野呂。

五日、諫早市本明川が氾濫し、市街地の大半が大洪水に遭う。城見町の自宅は川辺にあったため、もろに水をかぶったが、流失はまぬがれた。

一九五八年（昭三一）二十一歳

六月、北海道陸上自衛隊にて除隊。七月、帰郷。失業保険と家庭教師のアルバイトで生計をたてながら、昼間は市立図書館へ通い読書続ける。

一九六〇年（昭三五）二十三歳

父が新しい仕事についたため、父母、弟二人、次女のぬい、の五人が大阪へ移転。城見町の家に兄と二人だけ残る。

一九六一年（昭三六）二十四歳

伊東静雄が住んでいた大阪府堺市を訪ね、詩人を追悼する。

一九六二年（昭三七）二十五歳

十月、「日本読書新聞」の「読者の論文」欄に、「ルポ：兵士の報酬―不安と自由への恐れ―」が掲載される。文章が活字になった最初のものである。この年、雑誌「自由」に七十枚の短篇（題不明）を投稿。最終選考に残ったが、入選作なしで原稿は返却される。

一九六四年（昭三九）二十七歳

身体の不調が悪く、不眠に悩む。家庭教師の仕事もままならず、経済的にも不如意の年であったが、冬頃から「文学界」の新人賞をめざして小説を書き始める。

一九六五年（昭四〇）二十八歳

三月、「日本読書新聞」に、「私の読書ノート」入選作として「南ベトナム従軍記」（岡村昭彦著）についての感想文が掲載される。二十八歳の誕生日に、「第二十二回文学界新人賞佳作入選の電報を受け取る。十一月、その作品「ある男の故郷」が「文学界」誌上に掲載され、デビュー作となる。

一九六六年（昭四一）二十九歳

八月、「壁の絵」（文学界）を発表。第五十六回芥川賞候補作となる。十二月「狙撃手」（文学界）を発表。

一九六七年（昭四二）三十歳

二月「白桃」（三田文学）を発表。第五十七回芥川賞候補作となる。

九月「歩哨」(文藝界)を発表。

一九六八年(昭四三)三十一歳

六月「棕櫚の葉を風にそよがせよ」(文藝界、十二月「十一月」(文藝界)を発表。十月下旬上京し、丸合才一、丸山健二、三浦哲郎、山口譲、五木寛之らと会う。十一月、兄が仕事に失敗し、城見町の家を処分することになる。十二月、同市厚生町四一八番地のアパート「三日月」へ転居。

一九六九年(昭四四)三十二歳

五月「ロバート」(月刊ペン)を発表。春から夏にかけて健康状態が悪化し、長崎大学付属病院で精密検査を受ける。

一九七〇年(昭四五)三十三歳

二月「朝の光」(文藝界)を発表。週一回、二時間ずつの家庭教師のアルバイトを再開。八月七日、長谷川修が下関水産大学の練習船「天鷹丸」にて来崎。長崎を案内する。秋に同市の鎮西短期大学にて、五回の文学講座をもつ。十二月、NHK福岡放送局にて「十一月」を録音。

一九七一年(昭四六)三十四歳

十月「日常」(文藝界)を発表。三月七日、NHK長崎放送局よりラジオ小説「白桃」を放送。四月、本村淑子と結婚。諫早市仲沖町六五八番地(荒川方)へ移転。

一九七二年(昭四七)三十五歳

二月、ラジオドラマ「K書房主人」を放送。三月、ラジオドラマ「葉桜」を放送。三月「水晶」(文藝界、六月「世界の終り」(文藝界)を発表。七月、NHK福岡放送局にてラジオ小説「信号」を放送。九月「日が沈むのを」(文藝界、十一月「海辺の広い庭」(文藝界)を発表。後者は第六十八回芥川賞候補作となる。

一九七三年(昭四八)三十六歳

二月、十一月「水晶」を冬樹社より刊行。最初の著書である。三月、「海辺の広い庭」を文藝春秋より刊行。同月、「鳥たちの河口」(文藝界、「四時間」(文藝)を発表。前者は第六十九回芥川賞候補作となる。四月、「不意の客」(別冊文藝春秋、五月「詩人の故郷―伊東静雄と諫早―」(文藝界)を発表。五月、NHKにてラジオドラマ「ハ



諫早市城見町の自宅にて。
野呂、昭和41年ころ



諫早公園の眼鏡橋前にて。野呂29歳のころ。

ンター」を放送。九月、「鳥たちの河口」を文藝春秋より刊行。同月、NHK放送局にて「木に登る少女」を放送。十月「八月」(文藝界、十二月「草のつるぎ」(文藝界)を発表。後者は第七十回芥川賞候補作となる。同月、長崎大学付属病院に入院。胆嚢の手術をする。九月、「諫早の自然を守る会」の代表となる。この年から新聞に随筆などを数多く発表するようになる。

一九七四年(昭四九)三十七歳

一月、豆本「日が沈むのを」を神奈川豆本の会より、二月「日が沈むのを」を有光堂より刊行。三月「皆の冬」(文藝界、恋人(風景、「ハンター」(青春と読書、四月、安岡章太郎との対談「体験をいかに書くか」(文藝界、「柳の冠」(群像)を発表。「草のつるぎ」を文藝春秋より刊行。また、この月より翌年二月まで、随筆を「朝雲」に連載。七月「五色の髭」(季刊藝術)を発表。八月「日が沈むのを」(豪華本)を、ギャラリー「吾八」より刊行。一月「草のつるぎ」にて第七十回芥川賞を受賞。四月十三日、小倉にて「九州人」主催の講演会。五月九日、博多にて電通の井上寛治と会う。以後野呂邦暢原作、井上寛治脚本のラジオドラマが何作か制作・放送される。五月二十八日より、十回にわたって諫早市の公民館講座(文学講座)を引き受ける。八月、古山高麗雄来崎。長崎を案内する。十月、胃の具合悪く、病院で透視の検査の結果、異常なしと診断される。同月下旬、長崎・佐世保・松浦の三会場でもう一人の芥川賞受賞者森教と共に巡回文芸講演を行う。また、八月下旬から九月初旬にかけて、TVDキョメンター「有明海はいま……」(KBC九州朝日放送)制作のため、諫早・佐賀・福岡・天草・島原半島をめぐる旅を数回繰り返す。

一九七五年(昭五〇)三十八歳

一月、「隣人」(オール読物、二月「飛ぶ少年」(青春と読書)を発表。四月「冬の皇帝」(文藝界)を発表。この四月より五十二年三月まで「失われた兵士たち」(戦争文学試論)を「修観」に掲載。五月「地峡の町にて」(豪華本)を沖積舎より刊行。六月「回廊の夜」(すばる)、「失踪者」(野生時代)を発表。七月より九月にわたって、随筆を「毎日新聞」(西部版)の「視点」欄に連載。八月「蟹」(群

像、「高く跳べ、バック」(文藝界、「鳩の首」(別冊文藝春秋)を発表。九月、林京子との対談「昭和二十年八月九日(祭りの場)をめぐって」。十二月、「冬の皇帝」(豪華本を鶴声居より刊行。「一滴の夏」(文藝界)を発表。畑山博との対談「文藝界、佐々木基一、小島信夫との座談会「昭和の文学」梅崎春生」(群像、「弘之のトラネット」(小説ジュニア)を発表。同月、長崎原爆をテーマにした長篇「解縷の時」の執筆にとりかかる。

一九七六年(昭五〇)三十九歳

一月「畫」(群像)を発表。四月「一滴の夏」を文藝春秋より刊行。「魔術師たち」(オール読物を発表。この月、二十四日より、六月二十八日まで五十回にわたって、随筆「古い革張り椅子」を「西日本新聞」に連載。五月「もう一つの絵」(月刊フレイボーイ)を「刺刀」(問題小説、九月「とらわれの冬」(すばる)を発表。豆本「飛ぶ少年」を鶴声居より刊行。十月「諫早菫浦日記」(文藝界、十一月「諫早船唄日記」(文藝界、十二月「諫早水車日記」(文藝界)を発表。四月二日、成城の大岡昇平宅を訪問。九月七日博多行。石沢英太郎と対談。二十六日諫早市民センターでの南総開発反対集会にて講演。

一九七七年(昭五二)四十歳

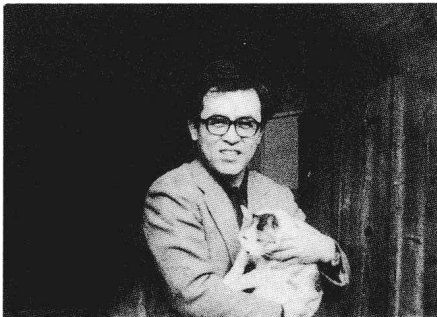
一月、「壁の絵」を角川文庫より刊行。三月「伏す男」(群像、「穴」(別冊文藝春秋、四月「ふたりの女」(展望)を発表。「諫早菫浦日記」を文藝春秋より刊行。この月より九月まで「文彦のたたかい」を「高二時代」に連載。六月「藁と火」(すばる、七月「朝の声」(季刊芸術)を発表。エッセイ集「王国そして地図」を集英社より刊行。九月、書き下ろしエッセイ「異邦人」を読むまで」を集英社刊行の「わが青春・わが文学」にて発表。十一月「花火」(文藝界)を発表。十二月「ふたりの女」(集英社)を刊行。九月、父政見死去(七十三歳)。

一九七八年(昭五三)四十一歳

一月三十日より二月十日まで、「朝日新聞」の「日記から」欄に、十一回にわたって連載。同月、「伊東静雄の諫草」(文芸展望)を発表。二月より昭和五十五年四月まで、十六回にわたって「丘の火」を「文



母、アキノさんと



自宅にて、愛猫バクと

學界」に連載。また、美術エッセイを、五十五年六月まで二十八回にわたって、「絵とおしゃべり」(山下画廊発行)に連載。「文彦のたたかい」を集英社文庫、「草のつるぎ」を文春文庫より、それぞれ刊行。四月「伊東静雄の周辺」(文芸展望)を発表。「海辺の広い庭」を角川文庫より刊行。同月より五十四年一月まで、十二回にわたって、「水瓶座の少女」を「高二時代」に連載。五月「ドアの向こう側」(野性時代、「河川の風景」(釣り談義・第四集)を発表。同月二十九日より五十四年十月十五日まで、随筆「小さな町にて」を「週刊読書人」に連載。六月「狼狽」(新潮、「南島行」(窓)を発表。七月「伊東静雄の故郷」(文芸展覧会夏季号)、「靴」(文芸、「部屋」(海)を発表。同月より十二月まで六回にわたって、「佐古啓介の旅」を「野性時代」に連載。八月「不知火の鼻雄」(鶴声居直虎)を「歴史読本」を発表。九月、詩集「夜の船」を沖積舎より刊行。川村二郎との対談時評「題材・文体・構成」(文藝界、「ドキュメント・エッセイ」ある青春の行方」(PHP)を発表。十二月「天使」(文芸、「顔」(別冊文藝春秋)を発表。「狼狽」を集英社より刊行。四月、淑子夫人と離婚。四月二日から雑誌「旅」の仕事で、奄美大島、与論島へ船旅に出る。五月末より九日間、九州在住の作家と韓国へ旅行。唯一の海外旅行となる。

一九七九年(昭五四)四十二歳

一月「葉隠の誕生」(歴史読本、「彼」(海、「縛られた男」(すばる)、「ある殺人」(小説推理)を発表。書き下ろしエッセイ「三人の男」をPHP社刊行の「結婚前のあなた」にて発表。一月より十二月まで、十二回にわたって、随筆を「新刊ニュース」(東販)に連載。同じく、随筆「怒の挑め」を一月四日から十二月二十七日まで五十回にわたって「日刊スポーツ」(西部版)に連載。随筆「古代史を愉しみたい方に」(婦人公論)を発表。二月「終わりの始まり」(歴史読本、「神様の家」(文藝春秋、四月「赤い鼻緒」(季刊芸術、五月「ぼくではない」(オール読物、「古代史への情熱最後まで」(長谷川修さんを悼む)「毎日新聞、六月「飛ぶ男」(問題小説、七月「公園の少女」(別冊小説新潮)、「邪馬台国」創刊にあたって「古代史研究の魅力語る」(「古代史シンポジウム傍聴記」(季

刊「邪馬台国」を発表。「愛についてのデッサン」佐古啓介の「旅」を角川書店より刊行。「地峡の町にて」を沖積舎より、「水瓶座の少女」を集英社コバルト文庫より刊行。八月「水の町の女」(太閤)、九月「ドライブ」にて「カイエ」を発表。エッセイ集「古い革張りの椅子」を集英社より刊行。十月「まぼろしの御殿」(小説推理、平壤の雪)(歴史読本)、「落城記」(文藝界)、「死守」(文藝春秋)十一月「赤毛」(カイエ)、十二月「馬」(別冊文藝春秋)、「ホクロのある女」(別冊小説宝石)を発表。十七日、久留米にて中野浩一選手にインタビュと取材。NHKテレビ番組「ルポルタージュ日本」のため。五月八日、上京。十七日、山口薩夫妻来崎。長崎を案内する。十九日博多行。「邪馬台国」の創刊準備のため。この月、季刊「邪馬台国」の編集責任者となり、以後博多と諫早をひんぱんに往復することになる。八月十五日、NHKテレビ番組NC9にて、終戦記念日のインタビューを受け、戦記図書館の話をする。

一九八〇年(昭五五) 四十三歳

一月「運動日報」(オール読物)を発表。「一滴の夏」を集英社文庫より刊行。下旬「活字と映像・それぞれの世界」と題して「長崎新聞」に三回にわたり連載。二月「幼な友達」(問題小説、歴史談義「邪馬台国論争のすゝめ」(文化評論)を発表。三月「水の中の給馬」(別冊文藝春秋)、「筑前の白梅」(歴史読本)、「田原坂一遭」(活性)、「四月」(田原坂一敗走)、「活性」五月「田原坂一反転」(活性)、「青葉書房主人」(問題小説)を発表。「夜の船」(豪華詩画集)を沖積舎より刊行。「私のシェヘラザードたち」を書き下ろしエッセイ集「読書と私」(文春文庫)に発表。映画評「生かすものの記録」について「アサヒグラフ」。「橋上幻想」「地獄の黙示録」を見て(すばる)を掲載。一月十四日、宮崎県日向市にて講演。二十日、長崎キネ旬友の会主催の第九回映画教室で「活字と映像」それぞれの「世界」と題して講演。三月二十八日、NHKテレビ番組「奥様のいっしょに―古代史を歩こう―」に出演。放送。四月二十日、博多の梓書院にて「邪馬台国」のために安本美典と対談。同日、RKB毎日放送より、ラジオドラマ「諫早嘉浦日記」(井上寛治脚本)を放送。二十六日、東京の山の上ホテルにて、「歴史と人物」(中央公論社)



自宅書齋にて。40歳ごろの野呂



昭和49年「草のつるぎ」で第70回芥川賞受賞
その授賞式にて

のための古田武彦と安本美典の、七時間にも及ぶ論戦の司会をする。五月一日、出演したNHKテレビ番組「歴史への招待 蒙古軍来る」が放送される。五月七日未明、心筋梗塞にて諫早市仲沖町の自宅にて死去(享年四十二歳)。六月「魔園にて」(太閤)、「イルカがブリカ?」(小説紀行)、「旅」(筑紫園造・磐井の反乱)(歴史と人物)、七月「足音」(遺稿)(すばる)、安本美典との対談「これからの邪馬台国研究」(季刊「邪馬台国」掲載。七月「落城記」が文藝春秋より、九月「丘の火」が、同じく文藝春秋より刊行される。アメリカにて「鳥たちの河口」を英訳収録した「TRANSLATION」誌が刊行。

一九八一年(昭五五)五月十日、「野呂邦暢遺品展」(諫早文化協会主催)が、諫早文化会館にて行われる。十月、向田邦子企画、柴英三郎脚本により「我が愛の城」(原作「落城記」)が、テレビ朝日より放映される。

一九八二年(昭五七)五月、エッセイ集「小さな町にて」が文藝春秋より刊行される。十一月「芥川賞全集」第十巻(文藝春秋)に「草のつるぎ」が収録刊行。

一九八四年(昭五九)七月、「落城記」が文春文庫より刊行。

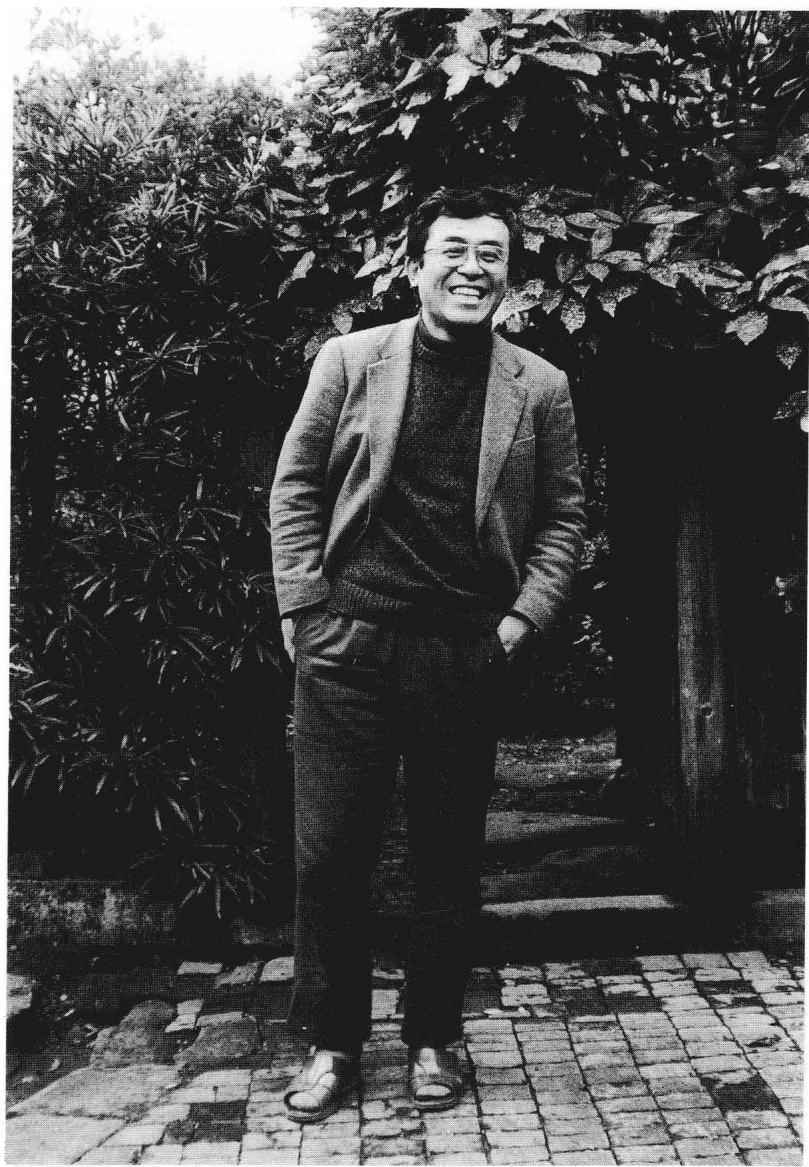
一九八五年(昭六〇)四月、「読書大全」(講談社)に、エッセイ「微妙な記憶の個人差」が収録刊行。八月、「諫早嘉浦日記」が文春文庫より刊行。

一九八六年(昭六二)六月十五日、七回忌。諫早文化協会(八江正吉会長)の尽力により、諫早上山公園に文学碑が建立。除幕式。

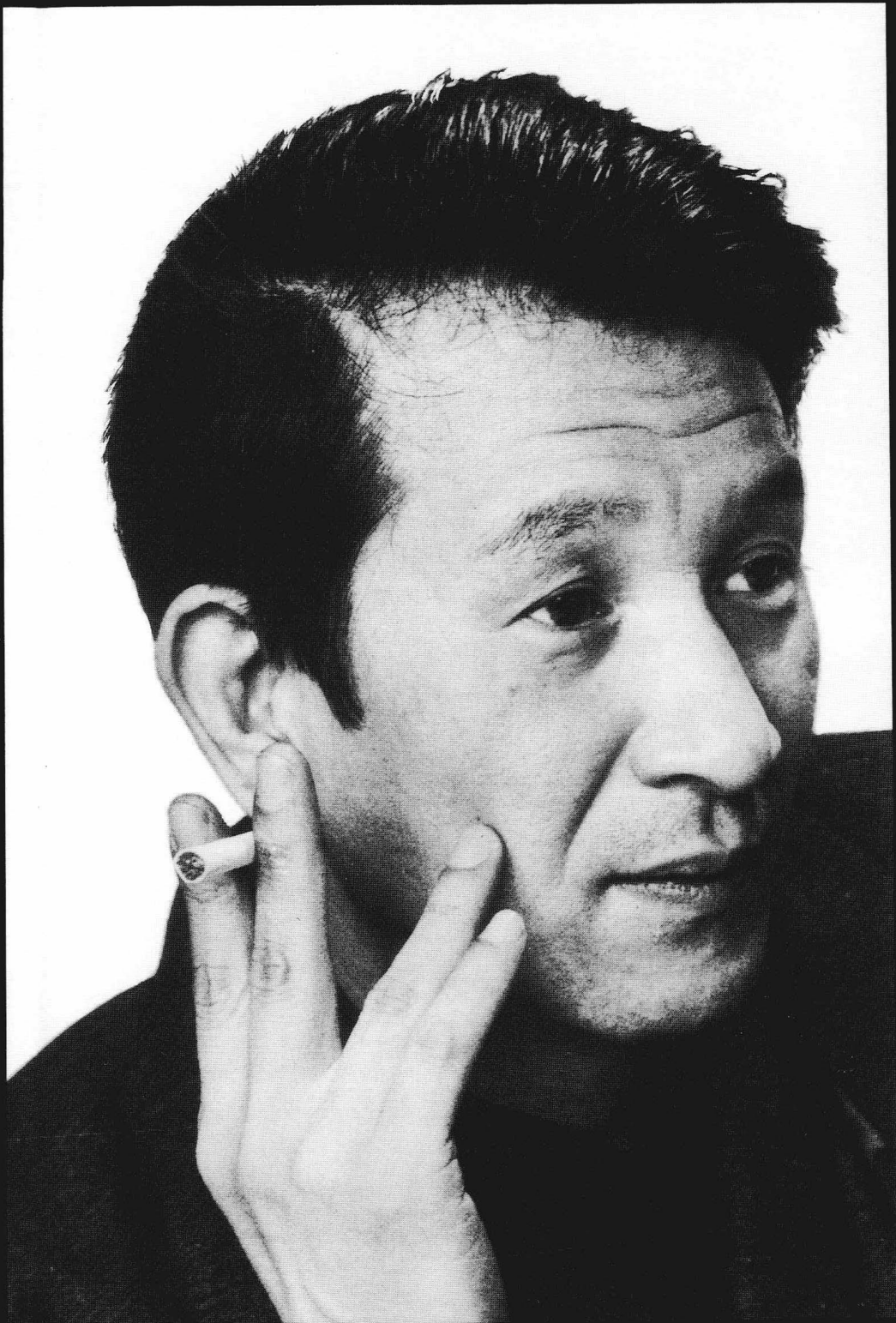
一九八七年(昭六三)六月、「日本随筆紀行・第二十二巻」(作品社)に、エッセイ「伊佐草氏のゆくえ」が収録刊行。

一九八八年(昭六三)十二月、「日本の名随筆・第八四巻」(作品社)に、エッセイ「列車の客」が収録刊行。

一九八九年(平成元年)八月、「昭和文学全集・第三十二巻」(小学館)に、「水島」が収録刊行。



諫早市仲沖町の自宅玄関前にて。38歳



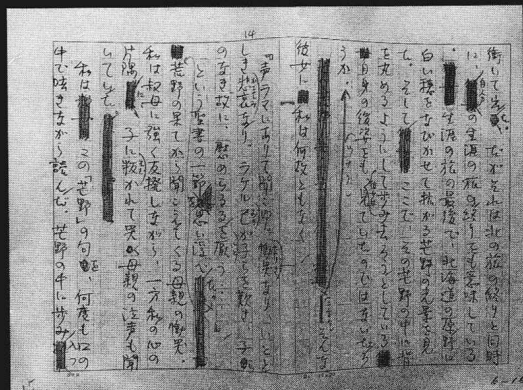
長谷川修 ヘビースモーカーで一日80〜100本もLUNAを吸っていた



長谷川修愛読の蔵書

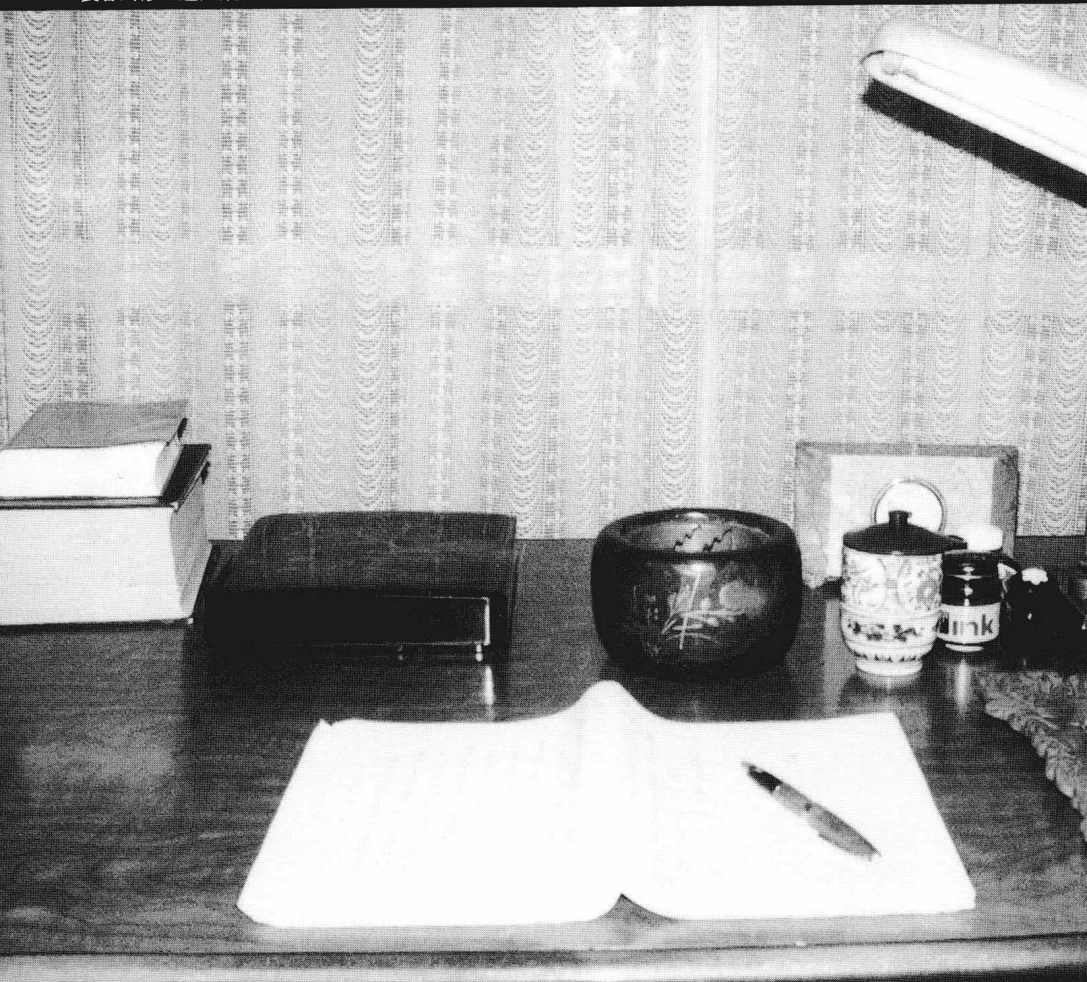


新潮クラブにて



『まぼろしの風景画』の直筆原稿

長谷川修の遺品類





小学校時代の長谷川。養母シンと



長谷川一歳のころ

長谷川修（はせがわ・おさむ） 年譜

一九二六年（大一五）

三月八日、山口県下関市に安光年治・シナの五男として生まれる。

一週間後母方の実家の長谷川順太郎・シンの養子となる。

長谷川は屋号を「瓦屋」といい、米屋、諸式屋、質屋などを商っていた。

一九二九年（昭四） 三歳

二月十六日、脊椎カリエスで実父、安光年治死去。

一九三一年（昭六） 五歳

四月一日、養父、長谷川順太郎肺結核で死去。この日より、下関市立第三幼稚園に入学。

一九三三年（昭七） 六歳

四月、下関市立松山尋常小学校に入学。

一九三八年（昭一三） 十二歳

四月、山口県立下関中学校に入学。

一九四三年（昭一八） 十七歳

四月、旧制福岡高校（理科甲類）入学。

一九四五年（昭二〇） 十九歳

京都大学工学部化学燃料科入学。

一九四八年（昭二三） 二十二歳

「松竹」の助監督の試験を受ける。合格するが、親族らの反対にあつて断念。大学卒業後、宇部化成に入社するが、半年後に咯血。秋、胸部成形手術を受け、小串の療養所で二年間の療養生活に入る。

一九五〇年（昭二五） 二十四歳

小倉常磐高校の美術教師となる。

一九五二年（昭二六） 二十五歳

同高校の化学を担当する。

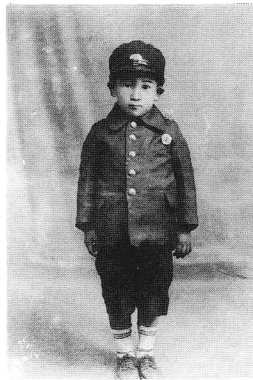
一九五七年（昭三二） 三十一歳

十月二十一日、堀尾玲子と結婚。

一九五九年（昭三四） 三十三歳



中学生のころ



尋常小学校入学当時



美術教師時代

一月二十一日、長女 郁美誕生。

一九六〇年（昭三五）三十四歳

三月、二度目の咯血、下関中央病院で約一年間の療養生活を送る。その間、大江健三郎、倉橋由美子らの出現に衝撃を受け、また入院中は安岡章太郎の『海辺の光景』を耽読した。

一九六二年（昭三七）三十六歳

「宿恋」を堀尾修三の名で『文芸首都』十一月号に発表。

一九六三年（昭三八）三十七歳

「キリストの足」が『東大新聞』第八回五月祭賞の佳作となる。このことが不本意であった修は同じ作品を『新潮』の同人雑誌賞に応募する。当時『新潮』は同人雑誌推薦というかたちであったので己むを得ず、般若悦夫、堀尾修三、長谷川修の三人で即席の同人誌を刊行。しかし修はこれまで同人誌に加わったことがなく、一人三役でこの雑誌を創ったのであった。同作品が『新潮』十二月号に掲載される。

一九六四年（昭三九）三十八歳

「僕の中のヨセフ」を『新潮』四月号に発表。「真赤な兎」を『新潮』十二月号に発表。この年より下関水産大学で化学の教鞭を執り始める。

一九六五年（昭四〇）三十九歳

「真赤な兎」が第五十二回芥川賞候補となる。「壁の上のガリレオ」を『新潮』五月号に、「孤島の生活」を『新潮』八月号に発表。

一九六六年（昭四一）四十歳

「孤島の生活」が第五十四回芥川賞候補となる。「哲学者の商法」を『文学界』五月号に発表。「来るべきもの」を『新潮』七月号に発表。「哲学者の商法」が第五十五回芥川賞候補。

一九六八年（昭四三）四十二歳

三月五日、実母、シナが心筋梗塞のため死去。「ヘリウム氏」を『新潮』八月号に発表。随筆「カントールと私」を『研究と指導』高校クラスルーム「数学特別号」に記載。

一九六九年（昭四四）四十三歳

「ふうてん学生の孤独」を『新潮』四月号、「天使の喇叭」を『早稲



長女、郁美と一緒に



小説を書き始めたころ